

# 自転車から道を見つめる

〔取材協力者〕  
石塚 裕也 氏 (株)サイクリングフロンティア

第6回の学生企画「土木出身の力とは!」にご登場いただくのは、(株)サイクリングフロンティアの石塚裕也氏。北海道大学大学院で土木を学び、現在ではサイクリングのガイドやサイクリングマップの監修を行うなど精力的に活動されています。自転車業界における土木出身ならではの視点について語っていただきました。

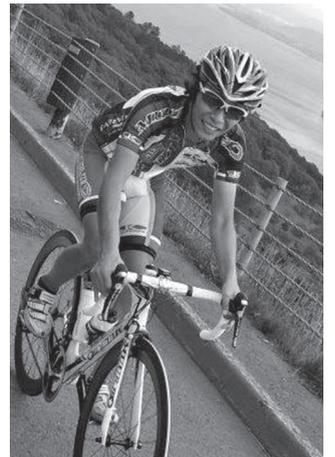
## 病室で自転車をこいでみた

——(株)サイクリングフロンティア 起業に至るまでの経緯を教えてください。

石塚——もともと乗り物が好きで、その中でも中学のころに自転車で道内を一周したり、高校で自転車部を自分でつくったりするぐらい自転車が好きでした。また、自転車ですつと道路を走っているため道路にも興味があり、土木に進むことを決め、北海道工業大

学工学部土木工学科(当時)に進学しました。在学中は、1年休学、1年留年という形で2年間、ヨーロッパの自転車競技のプロチームで23歳以下のプロ予備軍として選手として走っていました。そして、大学の5年目には国内にある自転車競技のプロチームと契約しました。大学を卒業後、北海道大学大学院に進学し、社会基盤工学専攻で2年間勉強しました。当時は阪神・淡路大震災の後であり、高速道路の高架橋の耐震補強が盛んに研究されていた時代で、自分も橋梁の耐震補強やそれ

に用いるスタッドを研究していました。そして2004年に大学院を修了後、2006年までは選手一本で活動していました。このころは、40歳まで選手として走り、その後は高校で自転車の顧問をしながら教鞭をとるという人生プランを持っていました。しかし、2006年12月、車の追突事故で頸椎を骨折したことが原因で、右半身麻痺となってしまいました。翌年の1、2月はとても自転車に乗れるような状況ではなく、歩くことすらまったくできなかつたんです。3月ごろ、病室で自転車をこいでみたら、なぜかわからなかったのですがこげました。競技用自転車はペダルに両足を固定するのですが、左足の力だけでこいでいたら、つられて動いていた右足の神経が戻ってきたんです。そして



石塚 裕也 氏  
ISHIZUKA Yuya

2004年北海道大学大学院修了。高校から自転車競技を始め、大学在学中にはヨーロッパで自転車競技の武者修行も経験。2001年からは自転車競技のプロ選手として活躍している。一方で2008年から始めたペロタクシーのドライバーとしてガイド技術を培う。長年の自転車経験を活かして2009年に(株)サイクリングフロンティアを起業。現在はサイクリングガイドとして、北海道の素晴らしさを伝えている。

## 自転車は今も続けているからこそ実を結んだ

——起業する際にきつかけや迷いはありましたか。

石塚——ペロタクシーのドライバーをしていたとき、観光ガイドが本当に楽しいと感じ、みんなでサイクリン

て長期リハビリをこなしていくうちに、だんだん右足の神経が回復して、2007年6月ごろには松葉づえで歩けるようになっていました。このころは松葉づえで歩いていながらも、自転車には乗れるという不思議な状態でした。2008年にはリハビリを兼ねてペロタクシーと呼ばれる自転車のタクシーにドライバーとして乗っていました。そして2009年に、(株)サイクリングフロンティアを起業しました。



写真1 北海道上富良野町。自転車に乗りながら十勝岳の美しい景色を楽しめる

グをしながらガイドをしたいと思っ  
たのです。ヨーロッパでは、サイクリ  
ングガイドという自転車で移動する  
観光の仕事がありました。それを思  
い出し、日本でサイクリングガイド  
の仕事をしている会社でアルバイト  
をしようと思いましたが、しかし、実際  
に運営している企業は北海道にはなく、  
日本でも2、3社のみでした。北海道  
は、自転車乗りにとってこんなにもす  
ばらしい場所なのにガイドがないのか  
と残念に思うのと同時に、そのような  
企業がないなら自分でつくろうと思い、  
起業しました。思い立ってから、2週間  
くらいで開業届を出したかな。もちろ  
ん起業に対して迷いはあったのですが、  
ここで引いてしまつてはダメだと思

いました。起業して1年目の2009  
年はお客様が年間7名のみで、年収は  
5万円でした。サイクリングガイドの  
仕事がオフの時期にはバイトを三つも  
四つも掛け持ちする生活が約4年間続  
きました。やつと仕事が軌道に乗り始  
めた2011年には震災で観光の需要  
が減り、仕事が振り出しに戻りました。  
この時期は本当に大変で、必死でした  
ね。2013年から日本へのインバウ  
ンドの需要が増え、海外からサイクリ  
ングをしに来る人が増えました。加え  
て、日本で自転車ブームが起きて、各  
自治体からの要望でサイクリングマッ  
プ作成やサイクルツーリズムの誘致活  
動への参加依頼を受けるようになり、  
今では年間2500人の方にサイクリ  
ングガイドをするようになりました。  
事故で自転車に乗ることができなかつ  
た時期もありましたが、自転車を今も  
続けているからこそここまで来ること  
ができたと思うと、ぶれずに貫いて頑  
張ってきたことが実を結んだのではな  
いかと思っています。

### 人とは違う答えを探し出す

現在の業務内容において、土木の

経験はどのようにかかわっているの  
でしょうか。

石塚——現在の業務はサイクリング  
のガイドがメインですが、土木と今の  
仕事は結構密接につながっているな  
と最近感じるようになりました。た  
とえば、国土交通省では今、サイクル  
ツーリズムを促進しており、そのため  
担当の方から北海道の道路や路肩等の  
状況を教えてほしい、とよく言われま  
す。実際私が指摘した、たとえば路側  
帯がガタガタで亀裂が入っている、と  
いった道路状況を自転車乗りのために  
直してくれたこともありました。道路  
状況を細かく把握できるのは土木目線  
が活きているからなのかな、と思いま  
す。サイクリングガイド以外では、北  
海道中のさまざまな地域のサイクリン  
グマップの監修も大きな事業ですね。  
胆振総合振興局等の北海道の行政機  
関や自治体、国土交通省から監修の依  
頼をいただいております。自転車のルート  
マップに道路状況を細かく記したマッ  
プの作成に携わっています。自転車で  
走りやすい道や景観の美しい場所など  
マップに記載する項目の選定等をして  
います。年間300日くらいガイドの  
仕事をしている一方で、業務の合間を



写真2 学生委員と石塚氏で撮影

縫って年10回程度自転車競技の大会に  
参加しています。

——若い学生に向けてメッセージを  
お願いします。

石塚——まず広い視野をもつことが  
大事だと考えています。学生のうちは  
どんどん旅にでた方がいいとも思う  
し、さまざまな人と交流した方がいい  
と思います。いろいろなことを経験  
し、いろいろなことを吸収して、自分  
の本当にやりたいことを見つけること  
が大事だと感じますね。そして、その  
中で独自性をどう打ち出していくか  
を、普段から自分で考えて行動するこ  
とが大事だと思っています。自分なり  
に人とは違う答えを探し出すという能  
力を、学生のうちから身に付けた方が  
いいと思います。

(担当編集委員…水越湧太、早内玄)